

ロッキー・ザ・ファイナル

2007(平成19)年2月1日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督・脚本＝シルベスター・スタローン／出演＝シルベスター・スタローン／パート・ヤング／アントニオ・ターヴァー／ジェラルディン・ヒューズ／マイロ・ヴィンティミア／ジェームズ・フランシス・ケリー三世／トニー・バートン (20世紀フォックス映画配給／2006年アメリカ映画／103分)

……あの音楽と共に、世界中で大ヒットした『ロッキー』の登場は1976年。それから30年、遂に『ファイナル』を迎えたが、そこでは還暦のロッキー(?)が、現役のヘビー級チャンピオンに……。所詮ノンタイトルのエキシビジョンゲームと思っただけ。決して自分を諦めないロッキーの姿がそこに……。なぜ彼は再度プロライセンスを申請したのか？ そしてなぜ、無謀な闘いに挑んだのか？ そんなロッキーとシルベスター・スタローンの姿に団塊世代のおじさんたちは心の底から共感し、楽しみ、そして元気づけられること確実！

前半30年＋後半30年……

わずか100万ドルの低予算映画ながら、アカデミー賞作品賞・監督賞・編集賞を受賞し、脚本を書き主演したシルベスター・スタローンを一躍スターダムに押し上げた『ロッキー』が公開されたのは1976年のこと。それからちょうど30年後の2006年、『ロッキー5』まで続いていた『ロッキー』シリーズが、遂にファイナルを迎えることになった。

1949年生まれ私は、25歳の1974年に弁護士登録し、30歳の1979年に独立したが、男にとって30歳は1つの大きな節目。そしてその30年後、すなわち、還暦となる60歳が2度目の大きな節目だから、私はあと2年後。ところで、シルベスター・スタローンは1946年生まれだから、2006年がちょうど60歳の還暦の年。つま

り、彼にとっては人生前半の30年は雌伏の時、そして後半の30年は『ロッキー』の大ヒットによってアメリカン・ドリームを実現させ、ハリウッドを代表するスターの1人として君臨し続けてきた時間というわけだ。

ちなみに、「硫黄島」2部作を大ヒット(?)させ、『硫黄島からの手紙』(06年)がアカデミー賞作品賞・監督賞にノミネートされたクリント・イーストウッド監督は今年76歳だから、90歳までは第一線でバリバリ活躍していそう……。しかるところ、誰が見てもシルベスター・スタローンは、少なくともクリント・イーストウッド監督よりは体力がありそうだから、彼も90歳までは第一線で活躍できること確実……。すると、彼のこれから3度目の30年は……?

今、ロッキー・バルボアは何を……?

人間は誰にでも旬の時代があるが、スポーツ選手をはじめとして、残念ながら旬の時代はいつまでも続かないもの。だからこそ、あの松坂大輔だって少しでも早くアメリカ大リーグへの移籍を希望したわけだ。もっともその点、年齢を重ねてもそれに応じてさまざまな役を演じることによって長年スターの座に留まることができる、映画俳優は恵まれたもの……。

それはさておき、2度のヘビー級チャンピオンに輝いた栄光のボクサー、ロッキー・バルボアは引退した今、どこで、何を……。それがまず『ロッキー・ザ・ファイナル』を企画するについて、最大のポイント。今回も脚本・主演した他、監督も兼ねたシルベスター・スタローンが考えたのは、かなりうらぶれてしまった還暦間近のロッキーという設定。具体的には、①愛妻エイドリアンと死に別れた喪失感からなかなか抜け出せず、②一人息子のロバート(マイロ・ヴィンティミア)は有名人の父を持つ息子特有の引け目から父親の元に寄りつかず、③エイドリアンの兄ポーリー(バート・ヤング)も静かな自分なりの引退生活を送っているため、ロッキーの心のすき間を満たしてくれる存在とはなれない、という寂しい状況設定だ。

したがって、今ロッキーは、地元のフィラデルフィアで「エイドリアンズ」と名づけたイタリアンレストランを経営しながら、客の求めに応じて現役時代の昔話を語るだけの生きがいのない寂しい毎日だった。もっとも、一流俳優はやはり

大したもので、シルベスター・スタローンの演ずるそんなしがない中年男の姿も結構ステキ……。

今、ヘビー級王座は……？

映画の冒頭、リング上での試合が映し出され、チャンピオンがあっけなく挑戦者をノックアウトするシーンが登場する。このチャンピオンこそ、33戦全勝という圧倒的強さを誇るディクソン（アントニオ・ターヴァー）。ところが、ボクシングファンというのは身勝手なもので、ディクソンがあまりに強すぎて試合が面白くないため、ディクソンが勝つとブーイングが起こるという状態。いくら強すぎても、かつてのカシアス・クレイのような「ほら吹き」の面白さがあれば人気も出るのだが、ディクソンは強すぎるうえに愛想も悪いから、勝ち続けるたびに人気低迷していくというからかわいそう。そういえば日本の大相撲でも、現在日本相撲協会の理事長をつとめている、かつての大横綱、北の湖が同じように嫌われていた（？）が……。

これは面白い企画！

ヘビー級の試合が人気を呼ばないため、テレビ局が企画したのが、歴代のチャンピオンによるコンピューター上のシミュレーションによる試合。野球でもプロレスでもボクシングでも、過去のヒーローと現在のヒーローを対決させ、どちらが本当に強いかを検討するのは結構楽しいもの。宮本武蔵と佐々木小次郎の対決は同世代だからたまたま実現したが、例えば宮本武蔵と柳生十兵衛を対決させれば、あなたはどちらの勝ちに賭ける……？

そんなわけで、テレビ局では現チャンピオンのディクソンと、伝説の王者ロッキーを対戦させたらどちらが勝つかというシミュレーション番組を放送したところ、それが大人気を得た。エイドリアンズの店のお客は大喜びだし、ポーリーもタダで店の宣伝になったナと喜んでくれたが、ロッキーはそれを見ても全然気が晴れず、逆に自分が今なおボクシングへの情熱を失っていないことを再確認させられる始末……。現在の喪失感から抜け出すための方策はナニ……？ そう考えたロッキーが下した決断はただ1つだった……。

よくできた脚本 その1 マリーとの再会……

この『ファイナル』も、ロッキー・バルボア30年の総決算とすべく、シルベスター・スタローンが脚本を書いているが、視点が明確な、よくできた脚本だと思う。その第1は、30年前に知り合った不良少女マリーを登場させたこと。不良少女だったマリー（ジェラルディン・ヒューズ）も30年間生きてきて、今はフィラデルフィアで小さなバーを経営しているシングルマザー。

マリーの息子ステップス（ジェームズ・フランシス・ケリー三世）は黒人系の血が混じっているようだから、彼の父親がどんな男性なのか、またマリーが30年間どんな人生を歩んできたのかについては、おおむね推察できるというもの……。しかし、ロッキーがそういう点をとやかく質問せず、ただマリーとの交流を楽しみ、ステップスとも自分の息子のように接する姿勢がいい。もっともこれは、マリーやステップスへの親切というよりは、むしろロッキー自身の生き甲斐探し……？

よくできた脚本 その2 息子との確執

「父親と息子の確執」は映画によく登場するテーマだが、ロッキーのような名人とそれを父親に持つ息子との間には、よくそんな症状が現れるもの……。もちろん、偉大な父親の跡を継いで、同じ世界で同等もしくはそれ以上になれば言うことはないが、それは、長嶋茂雄2世の長嶋一茂や野村克也2世の野村克則を見てもわかるとおり、多くの場合ムリ。そうすると、父親とは全く違う路線で、ということになるが、その場合は成功しても「親の七光」のおかげとされるハンディキャップがある。その結果、多くの場合、わが道を見失い、中途半端な人生になってしまう危険が……。

ロッキーの一人息子ロバートがまさにそれ。ロバートが今できることは、父親との接触を避けることだけ……。だから、ロッキーが会社を訪れ、「ちょっとお前の顔を見に来た」などと言われると迷惑なだけ……。ロバートにとっては、ロッキーが静かに引退生活を送ってくれることだけが願いだっただけ。したがって、突如ロッキーがプロライセンスを申請するなどと言い始めたことを聞いてビック

り。「親父、いい加減にしろよ！」と抗議に出かけたが……。

よくできた脚本 その3 プロライセンスは……？

いくら過去2度の世界ヘビー級チャンピオンであっても、既に引退したロッキーが現役に復帰するためには、プロライセンスを再度取り直さなければならないのは当然。その細かいルールはわからないが、〇〇協会のお偉方や事務局が、規約上どうなっているのかを審査し、またロッキーの健康状態や肉体状況をチェックして、オーケーか否かの結論を下すはず。したがって、本来これは書類審査だけで十分で、本人との面接は不要……。だって、本人の意向は申請行為によってわかっているわけだから、それをあらためて本人の口から確認する必要性などないはずだ。

しかし、それでは映画として面白くないから、シルベスター・スタローンをあえてその面接シーンを脚本に取り入れ、それを見せ場の1つとした。〇〇協会の結論は、「条件はすべてクリアしているが、結論は申請を却下する」というもの……。どこか中途半端だが、コトなかれ主義の〇〇協会なら、ある意味当然の結論かも……。そこで吠えたロッキーの名セリフが、「挑戦しようとする人間を止める権利が誰にあるんだ！」というもの。人間やはり言うべきことは言わなくっちゃ……。これによって、〇〇協会の結論がコロリと変わったのだから……。

さあ、懐かしいトレーニング風景を楽しもう……

30年間も『ロッキー』シリーズの人気が続いてきた結果、フィラデルフィア美術館前の大階段をロッキーが駆け上がっていくシーンは、全世界の人々の目に焼きついている。その結果、今やこの大階段はフィラデルフィアの観光名所となり、現地を訪れる『ロッキー』ファンは、階段を上り切った上の広場でガッツポーズをし、記念写真を撮るのが定番となっているとのことだ。

2月1日からキャンペーンしたプロ野球について、マスコミはお目当て選手をこぞって取材しているが、トレーニング風景だけで観客を映画館に動員することができるのは、世界広しといえどもロッキーだけ……。ロッキーのトレーニング風景に不可欠なものは、その他①生卵の一气飲み、②ジョギングパートナーの

犬、③肉のサンドバッグ叩きだが、さて『ファイナル』ではその風景をどのように再現……？

ちなみに、『ロッキー』の時はパッカスという名の犬だったが、犬は人間ほど寿命が長くないから、30年後の再登場はムリ。そこで『ファイナル』に登場するのはパンチーという名の犬だが、その犬がロッキーと一緒に走り回るようになるについても、シルベスター・スタローンの書いた脚本の冴えが……。

ギョウ直後のリング上は……？

『ロッキー』シリーズのハイライトは、当然ラスト十数分間のリング上での壮絶なファイトシーン。ロッキー・バルボアの持ち味は、何ととってもズシリと重いパンチ。これに対して、歴代の最強といわれたチャンピオンたちは、パンチはもちろんだが、スピードを持ち味にするボクサーが多かった。

『ファイナル』に登場する過去33戦負けなしのチャンピオン、ディクソンもそのタイプ。したがって、ギョウが打ち鳴らされた直後、チャンピオンの軽快なフットワークとよく伸びる左ジャブや右ストレートに対してロッキーはなす術がなく、まるでサンドバッグ状態。多分ロッキーにはチャンピオンがくり出すパンチのスピードが速すぎるうえ、運動選手にとって大切な動体視力が衰えているから、そのパンチが全く見えないのだろう。また仮に見えたとしても、それを避けることなどとてもとても……。こりゃ予想どおり、チャンピオンからいいようにあしらわれて、1ラウンドか2ラウンドでノックアウト……と、解説者も多くの観客も予想したが……。

見せ場は手抜きせず、しっかりと……

しかしそれでは映画にならないのは当たり前で、シルベスター・スタローンの脚本で注目されるのは、どの段階からどのようにロッキーが反撃を見せるのかということ。当初、軽くエキシビジョン・マッチと考えていたディクソンも、2ラウンド目からはがぜん本気に……。だって、猛ダッシュをかけてくるロッキーのズシリと重いパンチをボディに浴びると、一瞬息ができなくなるうえ、ヘタすると骨が折れてしまうほど……？

当初、ダウンするシーンも見られたロッキーだったが、例によって(?)「大切なのは、どんなに強く打ちのめされてもこらえて前に進み続けることだ。そうすれば、勝てる」という信念と、不死身の肉体でリング上に立ち続けたばかりか、観客にはじめてダウンしたチャンピオンの姿を見せつけることも……。こうなりゃ、観客は絶叫に次ぐ絶叫……。そして、遂に試合は大方の予想に反して最終ラウンドへ。さあ、互いに最後の死力を尽くしての攻防戦の結末は……。そして、レフリーたちの判定は……?

『ロッキー・ザ・ファイナル』のフィナーレは……?

世界ヘビー級チャンピオン、ディクソンとの試合の結果がどうなったのか? それをここに書くわけにいかないのは当然。それは、あなた自身の目でしっかりと……。しかし、少なくとも亀田興毅 vs. ランダエタの最初の試合や2度目の試合よりは数倍面白く、興奮することは確実!

また、ここで大切なことは、試合の結果ではないということだ。つまり、ロッキーがなぜ再度プロライセンスを申請したのか、そしてチャンピオンとの対戦を希望したわけではないが、その申し出をなぜ受けたのか、を考えることが大切なのだ。

世紀の大イベントをやり終えたロッキーは今、どこで、誰に、何を語っているのだろうか? もちろん、ロッキーは今、あのエイドリアンのお墓の前。彼が今、エイドリアンに語っているのは、チャンピオンとの対戦についてだが、この対戦によって、今こそ彼は亡くなったエイドリアンから一人立ちすることができたはず。したがって、これから30年間(?)の人生を彼は、あくまで自分自身の人生として歩めるはず……。あなたは、そう思わない……?

そんなこんなを考えつつ、「ロッキー」というキャラクターを創造したことにより、30年間も私たちを楽しませてくれたシルバスター・スタローンに感謝……。

2007(平成19)年2月8日記